シーン2

「……ふぅっ」

「あっ、司祭君……こんな夜に、礼拝堂に来るなんて、キミもお祈りをしにきたの？」
「うん、神様にお祈り、早く助けが来ますようにって……あと、あたしの呪いのこともね……」
「司祭君のおかげで、一時的には収まったんだけど……朝起きたら、またおっきくなって……普通は小さいままなんでしょう？　うぅ……あたしのは3、4回はヌかないと収まってくれないの」
「やっぱり、呪いだからかな……んっ、はぁ……もうっ、こんな感じで、急におっきくなるし……」
「でも、あたしはこれくらいじゃ負けないよっ！　ちゃんとヌいてれば小さくはなるし……」

「それにちょっと気持ちいいし……♡」

「……ん？　なんでもないよ……あ、そうだ司祭君？」
「手でシコシコしてヌくだけじゃなくて……もっと、別の方法でヌいて解呪ってできないかな？」
「うーん……聞いたことがある、とかでもいいんだけど、何か、ある？」

「…… へぇ、お口で？　舐めて、吸ってったりすると……」
「ごくり……」

「あっ、でも……それって、また司祭君にお願いすることになっちゃうね」
「さすがに、そこまでしてもらう訳には、いかない、よね……？」
「……あ、あたしとしては、できることは試しておきたい感じなんだけど……」
「あっ、そうだ。この前みたいに、あたしもしてあげるっていうのはどうかな？　お互いが、お互いのおちんちんを口でヌいてあげる……っていう感じで」
「それなら、キミも気持ちよくなれるし、大丈夫だよね？　……ね？」
「じゃあ、そこに、寝てもらっていいかな？　あたしが上になるねぇ……♡」

「ふっぁ……♡　司祭君の匂い、すごい……あ、あたしのも、嗅いじゃってるよね？　わっ、わわっ！？」
「で、でも……これも解呪のため、だから……はぁ、ふぅ……うぅ……えぇ！？　し、司祭君のおちんちんの匂いは、全然気にならないよっ！？　嫌な臭いじゃないし……」
「むしろ、あ、あたしは好きな匂い、かも……ちゅっ」
「ちゅくっ……ちゅぷっ、んぅっ……はぁ、んぅっ♡　あぁ、お口におちんちん、咥えられるのって……ひぅっ♡」
「こんな、感覚、なんだぁ……んぅっ♡　はぁ、はぁ、うぅっ……ちゅっ、ちゅぷっ……んっ♡　んぷっ、ちゅくっ」
「ちゅぽっ、んっ♡　ちゅぽちゅぽっ、ちゅぅっ、ちゅぽぉっ……はぁ、はぁ、はぁ……あぁ……♡」

「司祭君のおちんちんの匂い……あたしのお口の中、いっぱいに広がっちゃってる、はぁ……♡　すごいね……んっ♡　鼻に、抜ける、匂いで、クラクラしてきちゃうよぉ……♡　はぁ、あぅっ♡　んんっ、うっ♡」

「あたしの、おちんちんは、どう？　変じゃない？」
「……大きくて、硬いんだ……それに、あ、あたしの匂いがして、嫌じゃない、と……ふぅん……♡　んっ♡」
「はぁ、はぁ、はぁ、んっ♡　ふぅ……んぁっ♡……あっ、こ、これは……解呪のためにやってることなので、ぜ、全然いかがわしい行為じゃないよね？」
「キミはあたしの解呪のお手伝いをしてくれてるだけだし、あたしは……自分の体を必死に、治そうとしてる、だけ、だからぁ……んっ♡」
「ちゅくっ、ちゅぷっ、んっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅぽっ、ちゅぷちゅぷっ、ちゅむちゅっ、んぉっ、ちゅぅっ」
「ちぅちぅちぅ……んっ♡　ちゅぽっ、ちゅぽっ、ちゅぽっ、じゅぷっ、んっ♡　じゅぷじゅぷっ、んぉっ♡」

「んぁっ……はぁはぁ……んぅっ♡　キミのおくちぃ、んひっ♡　すっごく、いいよぉ……♡　はぁ、はぁ、んぅっ♡」
「自分でするよりっ……んぐっ♡　何倍もぉ、んぅっ♡　きもちよく、なっちゃってるぅ♡　はぁ、はぁ」
「あたしも……いっぱい、お口でぇ、してあげる♡　はぁぷっ♡　ちゅぷりっ、じゅぷんっ、じゅっぷっ」

「じゅっぽっ、んへぉっ♡　んちゅっ、ぬりゅっ、んっ♡　ぬじゅりゅっ、ぬぷぬりゅっ、んぉっ♡　にゅるっ、ぬじゅぶっ、んぉっ♡」
「お口のなかでっ、司祭君のおちんちん、震えてるの、分かるぅ♡」
「ちゃんとピュッピュってできるように、ベロベロしてりゅの、えらいねぇ♡　はぁはぁ」
「んっ♡　んじゅるっ、じゅぶじゅぶっ、んんっ♡　じゅっぼっ、じゅぼっ、じゅぷっ」
「じゅぶじゅぶっ、んんぅっ♡　じゅりゅっ、んぉっ♡」
「もぉ、れちゃう？　んぅっ♡　司祭君の、れちゃうのぉ？　はぁはぁ、らしてっ、らしてぇっ♡」
「ぜんぶっ、うけとめりゅからぁっ♡　あたしのっ、おくちっ、らしてぇっ♡」
「はぁぷぅっ♡　ぬちゅぬりゅっ、んぅっ♡　ぬりゅじゅるっ！」
「んっ♡　んんっ♡　んんんんぅぅぅっ！♡」
「んんんぅっ♡　ちゅるちゅるちゅるっ、ちゅぽんっ♡　んぉっ、んほぉ♡　おぉ……んっ、いっぱい、れたねぇ♡」

「ぁたしもぉっ、もうっ、でりゅのっ♡　んんっ♡　おかえひにぃっ、キミのおくち……♡　らしてあげぅねぇ♡」
「んんっ！　んんんんんっ！！♡♡」

「あっ♡　あぁっ♡　でりゅっ♡　司祭君のっ♡　おくちっ♡　きもちいっ♡　きもちいいっ♡　んんんっ！！」

「……んっ♡　あぁっ♡　はぁっ……はぁっ……はぁっ……あぁ……すっごい、いっぱい出しちゃったぁ♡　はぁ、はぁ、はぁ……んっ♡」
「……精液まみれで、解呪のこと、忘れて……お互いに気持ちよくなっちゃったね……♡」

「……あっ、違うのっ！　わ、忘れたわけじゃなくてっ……ちゃんとおちんちん、気持ちよくなって、精液出せてよかったねって話で……ええと、手でヌくよりも……すぐに終わってよかったねって……」
「……でも……あたしのおちんちん、まだ硬いまんまみたい……困ったなぁ……どうするのが、一番いいんだろう？」
「お口でヌいてもらった方が、自分の手でするよりは気持ちよかったし……やっぱり、こうやってヌくのがいいのかなぁ？」
「生殖器だから……普通に考えれば……女性器、おまんこに入れた方が……穴に、入れた方が、いいってこと……？」
「え？　いやいやいやっ！　司祭君は男の子だから、さすがにあたしでも、無理って分かるよ！」
「あ、も、もちろん他の女の人に頼むのはダメだし」
「……あの、司祭君？　ちょっと、提案があるんだけど、いいかな？」
「穴に、入れるんじゃなくて……お股と太ももで、おちんちんを締め付けちゃえば、穴みたいな感じにならない？」
「これなら、司祭君でも、できると思うんだけど、どうかな？　やっぱり……ダメ？　だよね？」

「……うん、普通そうだよね……そんなこと言われても困るのは分かるよ……」
「でも、今のあたしは、司祭君しか頼れる人が居ないんだよ……お願いっ！　司祭君っ！　一回試すだけだからっ！」
「あたしを助けると思って……ね？　このとおりっ……おねがい、しますっ！」

「うん、ありがとう……はぁ、ふぅ……」

「じゃあ、そこの絨毯にあおむけになって、自分の太ももを抑えてもらっていいかな……？」
「うん、そんな感じ……はぁ、はぁ、はぁ……♡」
「じゃあ、お股のところ、あたしのおちんちんを、入れて、いくね……んんっ♡」
「あぁっ♡　これぇっ♡　すごいぃっ♡　思ったとおりっ……んんっ♡　おちんちんっ♡　締め付けられてっ、気持ちいいっ♡　んぅっ♡」
「あっ♡　あぁっ♡　あぅんっ♡　はぁはぁ、はぁはぁ、んっ♡　んんっ、んんぁっ！」
「司祭君……♡　受け入れてくれて、ありがとぉ♡　お礼に、いっぱい、キス……してあげるねぇ♡　ちゅっ、ちゅっちゅっちゅっ、んんっ♡」
「ちゅるっ、ちゅりゅぅっ、んっ♡　ぬじゅりゅっ、じゅむりゅっ、じゅぷっ、んんっ♡　司祭君はぁ♡　舌まで美味しいんだねぇ♡」
「はぁはぁはぁ……んちゅっ、ちゅちゅっ、ちゅむりゅっ、んっ♡　んちゅっ、むちゅぷっ、ちゅくっ、ぬちゅっ、んぅっ♡」
「んぁっ、はぁはぁ……おちんちん、おっきくなってきたねぇ♡　ふふっ♡　キスされるの、気持ちよかったんだ？　ふふっ♡　じゃあ、こういうのは、どうかなぁ？」

「ふぅーっ♡　ふふふっ♡　んっ♡　はぁはぁ……やっぱり、お耳も弱いよねぇ♡　んっ♡」
「こっちも、ペロペロ、してあげるねぇ♡　んちゅっ、ちゅくっ、ちゅっちゅっ、ちゅむっ、ぬちゅぅっ、ぬじゅぶっ、じゅるるっ、んぉ♡」
「はぁむぅっ♡　くちゅっ、くちゃくちゃっ、んぅっ♡　くちゅむりゅっ、くにゅりゅっ、ぬりゅぬちゅっ、んんっ♡　ぬちゅぷちゅりゅっ」
「ぬちゅぬちゅぬちゅっ、んっ♡　ぬむりゅっ、ぬちゅぬちゅぅっ、んんぉっ♡　んぁっ！　はぁはぁ、はぁはぁ……んっ♡」
「司祭君のおちんちん、ビクビクしっぱなしに、なってきた、ねぇ♡　んっ♡」
「あたしのお腹にっ♡　硬くて熱いのが、ずっと当たってるよぉ♡　んぁっ♡　はぁはぁ、はぁはぁ、お股擦られて、またイっちゃうのかなぁ？」
「ふふっ♡　女の子がおマンコ、ジュボジュボにされてるみたいにっ、んぅっ♡　イっちゃうの？♡」
「いいよっ♡　出してっ♡　いいよっ♡　一緒に、イこ？♡　精子♡　ビュッビュってしてっ♡　気持ちよく、なろ？♡」

「はぁはぁっ♡　あたしの、お腹にっ……キミの熱い精子ぃっ♡　ぶっかけてっ、いいからぁっ♡　はぁはぁ、んっ♡」
「あっ♡　あっ♡　あっ♡　ビクビクしてるっ♡　お股マンコ、気持ちいいっ♡　締め付けっ、すっごく、イイよぉっ♡　あっ♡」
「イくっ、イっちゃうぅっ♡　これっ、気持ちいいっ♡　あっ、あぁっ！　あぁっ！　もうっ、イクっ、イくっ、イっ、ぐぅっ！♡♡」
「あぁぁっ！！　あぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！♡♡」

「あっ♡　あぁっ♡　んぅっ♡　すっごいぃっ♡　いっぱいっ♡　出てりゅぅっ♡　んっ♡　んっおぉ〝ぉっ！♡　んんっ♡」
「はぁっ……はぁっ……司祭君の、精子ぃ……♡　お腹に、いっぱい、ぶっかけられちゃったぁ♡　はぁ、はぁ……んっ♡」
「あぁ……はぁ、んっ♡　ふぅっ……ふぅっ……ふぅっ……はぁぁ」

「……ひぅっ！　あっ！　いやっ、そのっ！　ごめんなさいっ！」
「ええとっ！　これはそのっ！　えぇと……あぅぅぅ……」
「……と、とにかくっ、あたしのために、いろいろシてくれてありがとうっ！　司祭君ばっかりに負担をかけて本当にごめんなさい！」
「いつもありがとう！　本当に助かってるからっ！　……じ、じゃあ！　あたしは、これでっ！」